

# 反核医師ジャーナル

第63号 発行：核戦争に反対する医師の会・愛知

2011年3月30日  
vol.30 No.1

(名古屋市昭和区妙見町19-2)  
愛知県保険医会館気付  
TEL052-832-1345

29周年  
記念講演会

核なき世界へ

広島・長崎・福島を踏まえて



■講師 川崎 哲氏 あきら

(国際交流NGO「ピースポート」共同代表、  
核兵器廃絶国際キャンペーン副代表)

■とき 6月11日(土)  
午後2時30分～4時30分

■ところ 愛知県保険医協会伏見会議室

(名古屋市中区錦1丁目13-26 名古屋伏見スクエアビル9階)

2008年から「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」を主催するなど、被爆の実相と「非核のメッセージ」を世界に発信している川崎哲氏に、世界は核をどう受けとめているのか、核兵器廃絶への世界的機運をどう生かすのかを語っていただきます。また、東日本大震災時に被爆者とともに欧州・中東をめぐっていた川崎氏が、体で感じた「世界が見た『広島・長崎・福島～日本』」にも触れていただきます。

核戦争に反対する医師の会・愛知

代表就任に当たって

徳田 秋

飯島宗一、堀場英也両大先輩のあとを受けて、核戦争に反対する医師の会・愛知の代表という大役をお引き受けることになりました。

思えば五十八年前、名古屋大学医学部在学中、ビキニ環礁で被爆した第五福竜丸の乗組員を視察して帰られた日比野進教授に、学生会委員として特別講義をお願いに行った時以来、私の核兵器に対する関心はつづいています。

特別講義の最後に述べられた教授のことばは「核爆発の中では生命そのものが雲散霧消する、核兵器と医学は共存しえない」というものでした。このことは深く私の心に残り、今も私を支えています。

ともすれば掻き消されがちだった被爆者救済の声が、ようやく政治を動かすはじめ、固く閉じられていた救済の扉が、僅かながら開こうとしています。ただ、大多数の被爆者がすでに高齢であり、さらに運動を強めて全面救済を加速する必要があります。



一方、核廃絶を求め国際世論は大きく動き、核兵器

に固執する核大国は孤立を深めています。しばしば「悲願」といわれてきた核兵器の全面禁止が現実のものになるうとしています。もちろん樂觀は許されませんが、核攻撃を受けた唯一の国の崇高な義務として、核被害の実相を世界に発信しつづければなりません。

この重大な時期に当たって、愛知で護りつづけてきた核戦争反対の灯火をさらに広げ、盛んにするために、非力を尽くす所存です。ことに運動を引き継ぐ若い会員の獲得に力を注ぎたいと思っています。

二〇一一年ビキニ・デー

反核医師の会・愛知

規約

一、本会は核戦争に反対し、核兵器の廃絶のために医師として可能な範囲で行動することを目的とする。

一、本会の活動は、医師としてのヒューマニズムにもとづく

● 会費納入のお願い ●

二〇一一年度の会費(五千元)の納入をお願いいたします。同封の郵便振込用紙をご利用いただくか、左記の銀行口座あてにお振り込みください。

「核戦争に反対する医師の会」

三菱東京UFJ銀行・八事支店(普)0108297

※不明な点などございましたらお手数ですが、ご連絡をお願いします。

☎ 052-832-1345

ものであつて特定の政党または宗派のための活動は一切行わない。

ジャーナルの発行)

一、本会は核戦争に反対する医師、歯科医師及び医、歯学生によって構成する。(原則的に愛知県居住の人々を対象とする。)

一、本会に若干名で構成する世話人をおき、規約に従って活動を行う。世話人の中から代表及び事務局長を選出する。会員はボランティアとして申し出るにより世話人に加わることができる。

一、本会の活動として次の内容の事業を行う。

一、本会の規約を変更するためには総会を開く必要がある。

① 「核戦争防止国際医師会議」(IPPNW)の活動に協力する。(可能ならば国際医師会議に代表を派遣する。)

一、本会は会費及び善意の寄付によって運営される。会費は年間五千元とする。(学生は年間千円とする。)

② 核兵器禁止署名への協力。

付則、本会の連絡先は愛知県保険医会館内に置く。

③ 被爆者援護のための活動。

(本規約は一九八二年四月十一日より発効する。二〇〇四年五月二十二日改定。)

④ その他、本会の目的達成のための諸活動を行う。(たとえば研究会、講演会の開催)

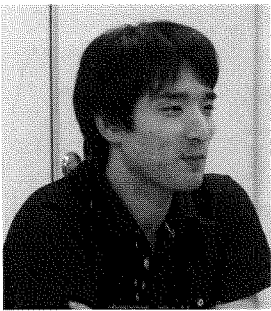
# IPPNW世界大会(スイス)に参加して

協立総合病院 研修医 吉見 倫典

IPPNW (核戦争防止国際医師会議) が主催するIPPNW第十九回世界大会がスイスのバーゼル大学で開催された。世界から約八百人の医師・医学者らが参加した。「核戦争に反対する医師の会」からは、代表団三十人が参加し、愛知代表として吉見倫典氏が参加した。その概要を報告する。※反核医師の会・愛知として行った代表派遣資金には十万三千円の協力が寄せられました。ご協力ありがとうございました。

私は反核医師の会の皆様の協力もあり、二〇一〇年八月二十五日から二十九日まで開催されたIPPNW世界大会に参加してきました。今回はどのような大会であったのか、どんなことが行われたのかについて報告させていただきます。

まずIPPNWについて説明します。International Physicians for the Prevention of Nuclear Warの略で日本語では核戦争防止国際医師会議といえます。主に核



大会に参加した吉見倫典氏

分科会は同じ時間に別々のブースでさまざまなテーマで開かれており、自分が興味のあるものを選んで、参加するというものを選びました。覚えていたものだけでもそのテーマは核兵器の廃絶、原子力発電の放射能物質拡散の影響、小火器による暴力、温暖化による影響など幅広いテーマで行われていました。

## 核兵器廃絶条約締結へ声をあげよう

兵器の廃絶や武器の削減を訴える活動をしており、一九八〇年に設立され、一九八五年にノーベル平和賞を受賞しています。隔年ごとに地域大会と世界大会が開かれており今回は世界大会がスイスのバーゼルで開催されました。

バーゼルは、スイス第三の都市であり、スイスの北西部に位置し、フランスとドイツに接しています。大会はスイス最古の大学であるバーゼル大学で行われました。

最初の二日間は学生会議と呼ばれ、学生の活動が主になっていました。私たちは八月二十六日から二十九日の大会に参加してきました。大会は主に全体会議と分科会にわかれています。

大会一日目は、開会宣言の後

に全体会議がはじまりました。そこに広島市長の言葉が届いており、その内容は核廃絶にはもつと日本政府のリーダーシップが必要。そして市民の動きが必要だというものでした。また、次のIPPNW世界大会は是非広島で行いたいというものでした。(その後次回大会は広島に決まりました。)

またスイスの外相も参加されており、核軍縮について市民には大きな責任がある。市民社会によって核軍縮は達成される。核兵器廃絶には法的なルールが必要だということを言っていました。私は、スイスの外相が大

会に参加するということにも驚きを感じました。

二日目、私は「核の傘は抑止力となるか、標的となるか」という分科会に参加しました。ここでは、様々な国の人の意見を聞く事が出来ましたが、多くの国が核廃絶には賛成と思いが、核の傘を抜けるのには不安があるというジレンマを抱えているように感じました。

大会三日目は大会最後の日であり、そこで言われていた事は、IPPNWでは核廃絶を目指す。

そのために核禁止条約の締結が必要であり、核保有国は核廃絶に責任がある、そして核保有国だけでなく持たない国も声を出していくことが必要、もちろん市民も声を上げていく事が必要(自国の政府に働きかける、市民社会で話しあう)といった事でした。

## 「核廃絶は不可能ではない」と変化

私自身大会に参加する前はIPPNWについて知らず、また反核についても何か行動をしていたわけでもありませんでした。核兵器廃絶についてもそれは不



全体会議の様相

可能だと考えていました。

けれどもIPPNWで言われたように核禁止条約を各国で結んでいき、核廃絶への大きな流れをつくる事ができたなら不可能ではないと感じました。

実際、IPPNW大会も、オバマ米大統領が核廃絶についてプラハで行った演説や、国連の潘基文事務総長が広島での平和記念式典に参加した事を受けて大きく盛り上がりつつあるように感じました。

最後になりますが、ここで反核医師の会の皆様にもお礼を申し上げます。大会に参加する前から、そして現地でも皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

参加報告記

# 第21回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める 医師・医学者のつどい in 奈良 二〇一〇 シルクロード終着の都から 世界の非核平和を

二〇一〇年九月十八日、十九日に「第二十一回核戦争に反対し、核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい」が奈良で開催され、全国から三百八十八人、愛知から十一人が参加した。

《オープニング》  
記念企画と  
仏教者挨拶の報告  
当会代表 徳田 秋

九月十八日午後、奈良市の奈良女子大学講堂は、全国から集

## 第21回 反核医師のつどい 開催要項

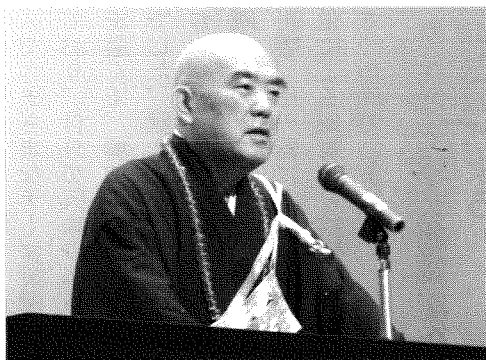
と き： 9月18日(土)~19日(日)  
と ころ： 奈良女子大学、奈良ロイヤルホテル

18日

- 【記念企画】 芝居・読み語り『父と暮せば』  
公演 佐々木梅治氏
- 【記念講演】 『NPT再検討会議とICAN運動』  
ティルマン・アルフレッド・ラフ氏 (IPPNW オーストラリア代表)
- 各地の活動交流

19日

- 公開シンポジウム『世界の平和に向け、奈良から第一歩を踏みだそう』
  - 富田宏治氏 (関西学院大学教授)  
「NPT再検討会議後の展望」
  - 川崎哲氏 (NGO ピースボート代表)  
「核兵器廃絶にむけた市民運動の役割」
  - 片岡勝子氏 (JPPNW 事務総長)  
「核兵器廃絶に向けて。被爆国日本・被爆地ヒロシマの医師として」



薬師寺長老 安田映胤師

まった三百八十八人の会員と市民の熱気に満ちていた。峰克彰実行委員長(奈良県保険医協会理事)の開会挨拶につづいて、記念企画として、先日物故された井上ひさし氏の作品「父と暮せば」が佐々木梅治氏(民芸)の読み語りで上演された。

ステージ中央に椅子が一脚、そして右片隅に深紅の彼岸花が一輪置かれていた。佐々木氏は台本を片手に、無造作な服装でスポットライトの中に現れ、軽妙な語り口で、「この台本全部を手抜きしないで一人でやりま」と断って、早速にはじまった。

時は戦後三年の夏、所は広島市・比治山の東側に立つ「マラック」に毛が生えた程度の簡易住宅。

登場人物は原爆にすべての身を寄りを奪われた図書館員の福吉美津江(二十三歳)と、原爆で死んだ筈の父・竹造の二人。竹造は美津江の恋の「応援団長」と自称するが、実は美津江の分身。

彼女は、自分が生き残ったことに罪悪感を抱き、自らに幸せを禁じているが、図書館に現れた文理科大学の助手・木下に心を惹かれつつある。

佐々木氏の手にした台本が、座布団になったり挿鉢になったり、落語家の扇子と手拭のように自在に使われる。簡素な舞台は能のそれを思わせる。音響は使われていないのに、観客は雨音やオート三輪の爆音を聞く。

木下に想いを寄せる美津江と、それを封印しようとする美津江の内心の葛藤が父と娘のやりとりを通して語られて行く。

劇の終わりに近く、木下から預かった原爆資料の中に混じった溶けた地蔵の首に父の最期の姿を重ねて、美津江は激しく動

揺する。

美津江は「うちはおとつたんを地獄よりひどい火の海に置き去りにして逃げた娘じゃ、そよな人間にしかあわせになる資格はない」という。

「生きている死者」竹造は「あよなむごい別れが未代まで二度とあっちゃいけん。おまいはそれを覚えてもろうために生かされとるんじゃ」と説く。

被爆者は語り部として生きねばならない、これこそ作者がこの戯曲にこめたメッセージであろう。

作者・井上ひさし氏は佐々木氏の舞台を見ることなく逝かれた由。機会があれば名古屋にも招いて、広く見てもらいたいステージである。

次に、仏教の都・奈良とあつて、薬師寺長老・安田映胤師が挨拶された。

師は、岐阜地蔵寺住職、世界宗教者平和会議日本委員会常務理事、日中韓国際仏教交流協議会常任副理事長、国際仏教興隆協会理事長の肩書きをもつ。

六月二十五〜二十七日に開かれた世界宗教者平和会議の四十年記念大会に出席されたが、

創立時には三十カ国の代表三百人だったのが、今年は百カ国から二千人が集まったとのことであつた。

師は、宗教の名の下に起こっている戦争を批判され、宗教者は相互に敬愛すべきことを説かれた。

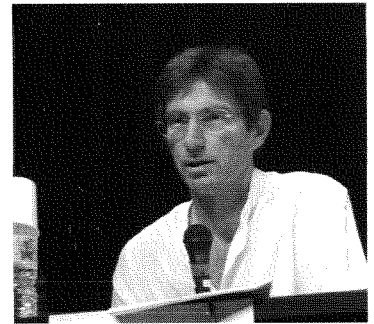
最後に、広島資料館で見られたシミュレーションに触れて、地球を氷河にするような核戦争は絶対に起こしてはならない、と短い挨拶を結ばれた。

### 記念講演「NPT再検討会議とICAN運動」報告

アイキャン  
当事務局長 中川 武夫

記念講演はIPPNWオーストラリア代表で、今年開かれたバーゼルでのIPPNW大会で副代表に選出され、ICANの代表でもあるティルマン・アルフレッド・ラフ氏による「NPT再検討会議とICAN運動」であつた。

氏は、ICAN運動 (International Campaign to Abolition Nuclear Weapon) は地雷禁止条約締結運動が市民団体、いくつかの



ティルマン・アルフレッド・ラフ氏

国際機関、例えば赤十字、ユニセフ、また賛同するいくつかの国が連携し、反対する大国を押しさえ込んで成功したこと、二〇〇〇年のNPT再検討会議の失敗と混乱、国連軍縮会議の「一歩一歩」段階的廃絶も成功していないことなどもヒントにして始められた運動で、「核兵器は全ての人にとって脅威であり、だからこそ全ての人に支持され、さまざまな団体からの幅広い運動を進めることができる」、「だからこそ核兵器廃絶条約の締結を成功させることができる」と訴えられた。また、冷戦終結という絶好の機会に、核廃絶を成功させられなかったことを教訓に、「核廃絶への機運の高まりつつある今、なんとしても成功させねばならない」と語った。二〇〇九年のオバマ米大統領

のプラハ演説、二〇一〇年五月のNPT再検討会議の一定の前進、四月の国際赤十字国際委員会 (ICRC) の「ヒューマニズムの観点から核兵器に反対」との表明、国際司法裁判所の「核兵器使用や核による威嚇は人道に反する」見解、「核廃絶条約案」もアップデイトされ、国連事務総長の潘基文氏も賛同されていること、また気候変動(核の冬、食料生産の低下)の観点からの核兵器への反対など、核兵器廃絶への機運は満ちていることを紹介、一人一人が、誰でもできる、すぐにも可能な運動としての、インターネット上に核廃絶への願いを発言する運動も紹介された。

医師にはヒューマニズムに基づいた特別な使命がある。この自覚に立って、「核廃絶条約締結のための多国間交渉を今すぐ始めるよう、さまざまな団体へ共同を呼びかけ、それぞれの国で、政府に、政治家に圧力をかけよう」と呼びかけた。

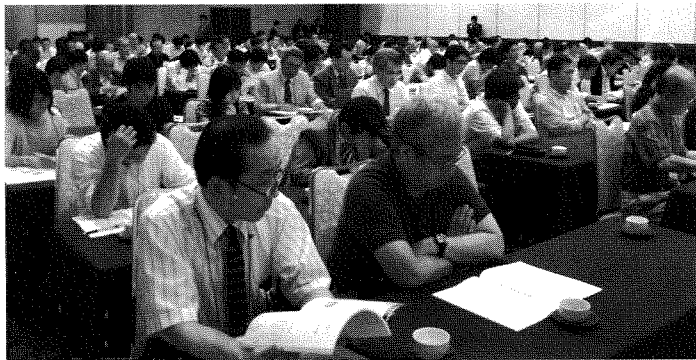
核抑止論や他国からの攻撃への脅威論や、核廃絶を狭い範囲の運動に自らバリアーを築くのではなく、幅広い運動を進めて

いくことの重要性を改めて気付かされた講演であつた。日ごろは、日常の仕事に追われ、考えることにも行動することにも制約がある日常が待っている現実を思いながら……

### 全体会・活動交流報告

当会世話人 能登 正嗣

前半の企画につづいて会場を奈良ロイヤルホテルに移して全体会。基調報告、そして活動交



流の報告が行われた。基調報告は「核戦争に反対する医師の会」代表世話人山上紘志氏よりなされた。

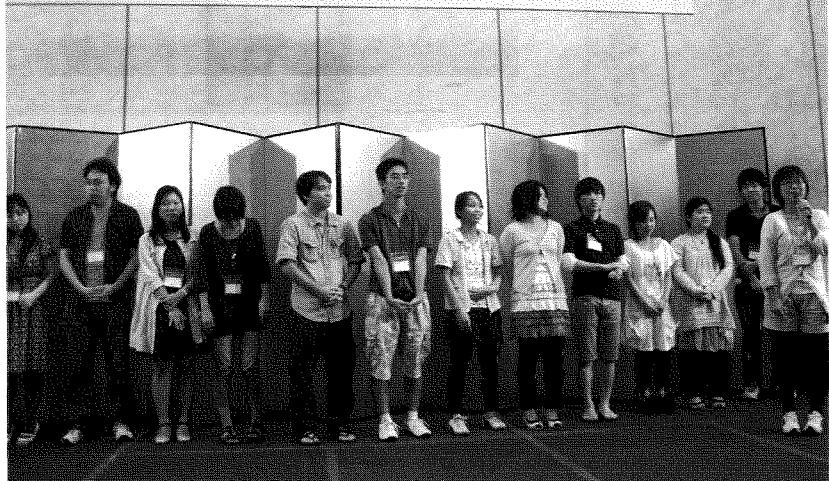
ここでは、二〇一〇年五月のNYでの核不拡散条約(NPT)再検討会議、八月の原水爆禁止世界大会、スイス・バーゼルでの第十九回核戦争防止国際医師会議(IPPNW)世界大会、沖縄普天間基地の問題と安保条約、日印原子力協定に焦点を絞った報告であつた。

これらの中で印象に残つたのはNYでの会議中、潘基文国連事務総長、カバクチュランNPT再検討会議議長、軍縮問題担当ドゥアルテ国連上級代表が、集つた世界の人々への「感謝」の言葉の連発であつた。それは核兵器廃絶に対する共感と連携を確信してのことである。

又、広島での秋葉市長は「核に依存の安全保障を考えることは絵空事」と言い切つた。

そして聖路加病院の日野原氏は「非戦の精神」を説き日米安保条約、沖縄普天間問題に言及。「核抑止論」や日米同盟の虚構に惑わされないようにと注意を喚起。最後に今後の課題は多く、

# 回核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める 医師・医学者のつどい in 奈良



医学生も元気に発言

劣化ウラン弾、原発、プルトニウム処理問題が残る。いずれにしても日本と世界が協力して平和のために絶え間ない運動が大切と報告された。

次の活動交流では七組織の代表七氏がそれぞれの運動を報告した。

奈良民医連の吉川周作氏は「N Y行動でのPANW(核戦争に反対する医師の会)参加報告」を行った。ここで行った署名活動は今まで不発であったが今回百筆の賛同を得たこと、缶バッチの人氣等により一般市民にも反核は徐々に浸透してきているとした。又、新しい動きとして米国で医師の街頭デモが行われた。そして「我々の安全を保障してくれる核の数は、それはゼロ」との名

発言があった。

石川県の病院理事長原和人氏は「核のない世界」夢から実現へ」と題してス

イスでのI P P N W大会の報告があった。特記すべき事として

P A N Wが初めて「世界の核兵器被害者」の分

科会開催である。つづいて大阪

で「大阪反核平和医療人の会」

の発足を同事務局長の武田勝文

氏から報告された。命を守る立場ですべての医療関係者の協力共同である。

広島市の青木克明氏からは山口県上関町に建設予定の原発に対する反対運動の報告があった。

原発建設反対の根拠を科学的・生物学的にまた環境学的に鋭く

迫り、時にはデモ・ハンストに及ぶ運動は心打たれるものである。

沖繩の反核医師の会から武居洋氏は普天間基地即時閉鎖撤去を訴えた。県民の八四%が「辺野古移設に反対」をアンケートに表明している。強く我々本土の者に対し、支援要請があった。埼玉反核医師の会から雪田慎二氏が来年の全国のつどい開催は埼玉であることを報告。命、基本的人権と視野を広くもち、更に活動のアイデアを持ちかえらるる元気の出る集会にしたいと結んだ。

核戦争に反対する医師の会(P A W N)の学生会から秋田大学中村まなびさんが活動報告。国際的な核兵器廃絶の流れの中で種々の活動を行い、同じく医療を学ぶ学生に情報を発信。さらにこの運動を進展させていく

《公開シンポジウム》  
**奈良在住被爆者  
秋山勝彦氏の発言要旨**  
当会世話人 浅野 晴義

氏は一九四〇年広島生まれ、奈良在住。五歳八ヶ月で爆心地より一・九kmの場所被爆。脚を怪我する。早稲田大学法学部卒業。建設会社退職後は埼玉県川越の語りの会に所属する。被爆後五十年間は原爆の話はしなかったが、遠野で被爆者のお婆さんに勧められて「被爆の語り部」となった。二〇〇三年以降、地元の奈良でも講演活動をはじめた。

奈良では、およそ小学校の六〇%がヒロシマにでかける。氏が話をする時には、凡そ一回二時間位で、時には一日に二〜三校で話をしていくという。ご自分では、生存している最後の語り部となるかもしれない、と思っているとのことであった。

N H Kで、「封印された原爆調査記録」を放映したが、A B C Cを中心としたこの調査記録が

もつと早く出されていたら、被爆者救済にも役にたつたはずと思われる。

被爆体験者は、憎しみ、怒りから行動しているのが普通であるが、歌声の運動なども自分には美し過ぎるのではないかとも思える場合がある。また、二〇一〇年五月のN P T再検討会議には自分の代わりに次男が出席したが、彼から聞いた限りでは、お祭り騒ぎといった感じもあり、本当に成功といえるかどうか冷静に見守る必要があると思う。

被爆者は、心理的に影響された面も強く、私の場合でいえば「つくつくぼうし」が鳴きはじめると、全く力がなくなる。その時期が自分の六歳の頃の記憶として一番辛いのである。といったお話であった。

《シンポジウム》  
**「世界の平和に向け  
奈良から第一歩を踏みだそう」に参加して**  
当会世話人 浅海 嘉夫

反核医師のつどいに参加する



全体会でまよめの挨拶をする  
中川事務局長

のは今回が初めてであるが、平城遷都千三百年に惹かれたのかもしれない。「世界の平和に向け奈良から第一歩を踏み出そう」というシンポジウムテーマで、最初に奈良在住の被爆者秋山勝彦氏から挨拶をいただいた。

三歳の被爆後、いじめ、差別ゆえ誰にも話さなかった被爆体験を、六十五歳になり話し始めた。「語り継ぐべきこと、忘れてはならないこと」を伝える意味に気付き今では被爆体験語り部として全国の小学校に出向いている。戦後軍部が、米軍への心象を良くするために、小学生死亡率などの資料を極秘に提供していたことが最近わかった。

このことへの怒り、憎しみを率直に述べていたが、その穏やかな語りからは計ることのできない被爆者の心情を目の当たりにした。

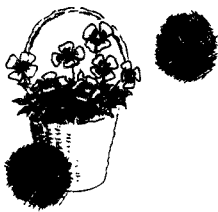
さて本題のシンポジウムだが、関西学院大学法学部教授の富田宏治氏が、先般のNPT再検討会議の成果と課題について概括を述べた。被爆国日本こそ「核の傘」「核抑止力」論から脱却が必要で、そのための更なる世論、運動を訴えた。氏は安斎青郎先生の後を継ぎ原水禁世界大会起草委員長の大役をこなしている。彼とは医学生時代に知らない仲でもなかったので声をかけたかったが、あいにく機会を逸した。

NGOピースポット代表の川崎哲氏は、被爆者が客船に乗り世界の人々、政治家に被爆の姿、核兵器禁止を訴える手助けをしている。初めは無理といわれていた地雷禁止条約、クラスター爆弾禁止条約も実現した。今は核兵器禁止条約作りを具体化する段階に入っている。核廃絶は無理という「あいつらを信じるな」というメッセージが耳を離れない。

I P P N W 日本支那事務総長、広島大学名誉教授の片岡勝子氏は、NPT再検討会議ではNGOの盛り上がり、被爆者の訴え、潘基文国連事務総長の決意が参加者に伝わる一方、日本政府が核軍縮のリーダーシップをとることに及び腰であったことを指摘し、やはり米国の核抑止力に依存した姿であると述べた。国際人道法の観点から、まさに核兵器はその使用、それによる威嚇は違反しており核兵器禁止条約の必要を重ねて訴えた。

シンポジウムを初め二日間の「つどい」に参加して、核兵器禁止が待ったなしの課題となっていること、その中での医師の役割は大きいことを改めて感じた。

せつ々しくなので延泊し晩夏のお寺巡りを楽しんだが、「遷都ブーム今ひとつ」とのタクシー運転手の嘆きが今も秋空に舞っている。

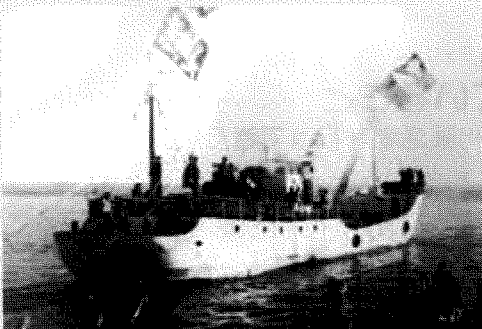


核戦争に反対する医師の会・愛知

総会&DVD「わしも死の海におった」上映会のご案内

- 日 時：5月28日(土) 午後2時30分～4時30分(上映会は2時30分～3時30分)
- 会 場：愛知県保険医協会伏見会議室(中区錦1-13-26 名古屋伏見スクエアビル9階)
- 参加費：無 料

「わしも死の海におった」作品紹介



被災した第二幸成丸(高知県室戸船籍)

「ビキニ事件」から57年。しかし、第五福竜丸以外へのべ1000隻の被災漁船が存在したことはほとんど知られていません。被災漁船の実態を25年以上に渡り調査している高知県の調査団を取材。多くの漁船が「死の灰」を浴びたこと、水爆実験を目撃した様子など生存者の貴重な証言を取材。また、取材中、米原子力委員会の機密文書を発見。アメリカ側の公文書、日本政府の公文書などからもこれまで知られることのなかった「もうひとつのビキニ事件」の存在を描いています。(DVD紹介から抜粋)

制作：南海放送 時間：57分

**厚労省 「原爆症認定制度の在り方に関する検討会」はじまる一方、申請却下が増加  
県内でも「申請説明会」開催、より一層の被爆者支援を**

原爆症認定集団訴訟は、二〇〇九年八月の「合意」により、定期的な協議の場を通じて、新たな訴訟提起の必要のないよう解決を図る事が確認されました。しかし、定期的な協議の場がなかなか行われず、ようやく第一回が二〇一〇年一月に、第二回が二〇一一年一月十四日に行われる予定になっていました。しかし、第二次内閣改造が同日に行われたために延期。その後

「原爆症認定制度の在り方に関する検討会」開始される  
こういつた中で、厚労省は表記の検討会をスタートさせました。現在二回会合が行われ、一月二十七日の第二回検討委員会では参考人発言が行われ、伊藤直子さん(日本被団協原爆被爆者中央相談所理事)は「原爆の健康影響は未解明の部分が多く、

厳密な科学的根拠がないと原爆症と認めない現行制度は矛盾している」とし、全被爆者に年金的性格の手当てを一律支給しうえて病人には病状の重さに応じて加算する新制度を提案しました。現在の認定審査・制度は「確認書」やこの間の司法の判断との乖離は明らかであり、認定基準の大幅改定と、国家補償のと

被爆者支援ネットワーク総会へぜひ参加ください  
県内でも被爆者の元へ却下通知が届いており、愛友会と集団訴訟弁護団主催の「申請説明会」が行われています。

県内の被爆者約二千九百人の平均年齢は七十六歳を超え、医療・福祉、生活など多面的なサポートが必要となっており、支援の輪を広げていくことがとても重要となっています。こうしたもとで、あいち支援ネットワークの総会を右記のとおり、開催します。ぜひ、多くの方のご参加をお願いします。

協議日程が決まらないまま現在に至っています。そればかりか、この間滞留していた被爆者の認定申請のうち、約八六%を却下するなど、新たな被爆者の切り捨てを進めています。昨年九月に厚生労働省から公表された二〇一〇年四月～六月分の審査千六百十一件の結果は、認定率一五・三%で、被爆者援護法の趣旨・「新しい審査の方針」・この間の裁判判決が示した内容に背いたものになっていきます(表参照)。

表：厚生労働省発表の2010年4月～6月審査分「疾患別認定・却下件数」

	認定	却下(放射性起因性)	却下(要医療性)	却下(放射性起因性+要医療性)
悪性腫瘍	175	243	106	85
白血病	26	28	19	5
副甲状腺機能亢進症	2	7	4	0
白内障	4	240	5	24
心筋梗塞	14	257	0	20
甲状腺機能低下症	13	111	0	8
慢性肝炎・肝硬変	8	54	1	9
その他	6	277	3	0

『つたえようヒロシマ・ナガサキ in あいち』  
—被爆者支援・被爆行政の転換、核兵器廃絶をめざすネットワーク—総会の案内

- とき 5月14日(土) 13時～16時頃 (12時半開場)
- ところ 名古屋市総合社会福祉会館大会議室 (名古屋市北区清水四丁目17番1号北区役所7階)

『記念講演』

◆被爆者が求めていること

—総合病院で相談活動を行ってきた中から  
塚本 弥生氏 (広島市民病院医療ソーシャルワーカー)

『弁護団からの報告』

◆原爆症認定訴訟の現況と今後の訴訟について

樽井 直樹氏 (原爆症認定集団訴訟愛知弁護団事務局長)